

令和5年12月15日

幕別町議会議長 寺林 俊幸 様

民生常任委員会委員長 谷口 和弥

### 議員派遣結果報告書

令和5年9月21日に決定された議員派遣について、次のとおり報告する。

#### 記

- 1 派遣名 先進地視察調査（民生常任委員会）
- 2 目的 本委員会が所管する事項に関する先進地の取組の調査・研修のため。
- 3 派遣場所 札幌市、札幌市民防災センター（札幌市）、  
日本理化学工業株式会社美唄工場（美唄市）、  
砂川市
- 4 派遣期間 令和5年11月9日～10日（2日間）
- 5 派遣議員 委員長 谷口和弥  
委員 荒貴賀 塚本逸彦 内山美穂子 小田新紀  
長谷陽子（以上6人）
- 6 派遣内容  
(1)【札幌市】  
視察項目 札幌市未来へつなぐ町内会ささえあい条例について  
視察目的 今年度に制定された「札幌市未来へつなぐ町内会ささえあい条例」について、条例制定に至った目的と経緯や制定までの経過のほか、町内会活動への参加や加入促進に向けた取組や支援策などを調査する。  
応対者 札幌市市民文化局市民自治推進室市民自治推進課  
寺川 嘉一 町内会支援担当係長  
内 容 地域の暮らしを支える地域コミュニティの中核として、これまで札幌市の発展に大きく寄与してきた町内会だが、やはり加入率の低下や役員の高齢化などの課題が多くあり、本条例制定は、市長の公約であった。  
「地域住民」、「事業者」、「市」が一体となって町内会の活動を支えることを目指した。  
市としては、助成金制度や、デジタル活用の促進に関わる費用を拡充したり、新規事業として、ボランティア活動の環境整備にも努めたりしている。  
さらには、専門業者に委託し「町内会アドバイザー派遣」の制度を設け、「総合型支援」、「継続型支援」という2つの支援タイプにより希望する町内会を支援したり、転居者がすぐに自分の町内会が分かるようなアプリを導入したりするなど、様々な観点からの取組をされていた。

所 感 幕別町においては、今年度より公区制度が廃止され、今後の町内会活動の取組がより一層注目されるところである。

今回の札幌市の取組は、町内会を支えるためには「法的な裏付けが必要」と市長が判断し推進している。今年度制定されたばかりの条例であることから、まだまだ大きな成果が見られたわけではないが、解散を考えた町内会が若い世代により活性化されてきた事例などがあるなど、今後の発展が期待される。

本町でも、各町内会に全てを任せるだけではなく、まさに地域全体で町内会を支えていくこと。そのために、それぞれができる役割や使命、必要な支援を考えていかなければならないと感じる機会となった。



▲説明員（寺川嘉一 町内会支援担当係長）



▲研修状況

## （２）【札幌市民防災センター】

視察目的 防災意識向上を目的とした体験型施設の見学

視察概要 施設見学

内 容 札幌市民防災センターは本年４月、「防災・防火について楽しく学べる場を創る」をテーマにリニューアルオープンした。

スタッフの説明を受けながら、プロジェクションマッピングを活用した火災映像に向かってセンサー付き消火器で火を消したり、震度７級の地震や風速３０メートルの防風を体験するなど様々な災害の脅威を身近に感じることができた。



▲施設内見学



▲施設内見学

### (3) 【日本理化学工業株式会社美唄工場（美唄市）】

視察目的 障がい者雇用の取組について、障がい者雇用に至るまでの経緯や個々の能力に合わせた仕組みづくりのほか、SDGsへの取組などを調査する。

応 対 者 日本理化学工業株式会社 西川 一仁 常務取締役  
内 容 ①障がい者雇用に至るまでの経緯

日本化学工業株式会社は昭和12年川崎市で創業、環境や健康に配慮したホタテ貝殻を使用し粉が飛びにくいダストレスチョークやガラスに書くことが出来、消すことが出来るチョーク「キットパス」を開発し現在、全国の70%のシェアを占める。輸出も手掛け川崎市と美唄に工場がある。1959年川崎市の支援学校の教師より知的障がい者2名の雇用を依頼されるも諸般の事情で雇用は困難と断ったものの、せめて職場体験をと強く頼まれ、2名の知的障がい者を受け入れた結果、二人のひたむきな姿に感銘を受けた従業員の強い要望で1960年に2名を雇用したのをきっかけに、以後全従業員の7割と他には例のない民間企業で、マスメディアにも取り上げられている。

前会長は、当初雇用した二人の勤務態度が何故こんなにも一生懸命なのか、施設ならば楽に過ごせるのにと理解しがたい部分があったという、ある日の法事場で住職に「人間の究極の幸せとは、人に愛されること、ほめられること、役に立つこと、必要とされること」の4つ会社で働くことを通じて叶えられる幸せ。福祉施設では味わえませんよと聞き気づかされ、障がい者の多数雇用に踏み切ったという。

#### ②個々の能力に合わせた仕組みづくり

人をどう活かして能力を引き出してゆけるのかは会社の責任という理念の元、障がい者に対しては健

常者の視点ではなく彼らの視点で物事を見て工夫していくこと、理解することで仕事を達成することが出来た。本人も必要される人間と感じモチベーションも上がって行く、質の高い人材が集まるのではなく質の高い人材をどう育てる事が出来るかが重要とのこと。

採用に当たっては四つの約束を守ることが出来れば仕事に時間がかかっても採用し、現在まで障がい者からの辞職者はゼロ。

工場内は数字や計算、時間などを文字ではなく色や形、砂時計などを用いるなど目に見える化をすることで作業内容を理解し支障なく業務を行っている。

会社の通路の壁にはMVPや6S運動等どんなことが達成できたかを明記して掲示して称賛することで達成感を感じ次のステップへと繋がって行けると説明を受けた。

### ③今後の展開、計画、SDGsへの取組

人にやさしい、環境にやさしい、社会にやさしいという観点から目標達成に向けての取り組みとして障がいのある社員の能力を発揮し活躍できるように工程を合わせるよう工夫し、達成目標を掲げ達成者を表彰するなど社員のモチベーションを高められる職場づくりや障がい者や健常者の区別なく働ける職場、製品関連ではホタテガイ貝殻やライスワックスを原料とした環境にやさしい製品や脱プラパッケージ、ペットボトルキャップの再利用等に取り組んでいる。今後も障がいに関係なく生き生きと働き活躍できる社会づくりに貢献して行きたいと語った。

## 所 感

作業中の工場内を見学したが、作業手順が一目でわかる工夫が随所にされた職場環境の中、皆黙々と見事な手さばきで仕事をされ、れっきとした職人として働く姿に圧倒された。中には、挨拶もしてくれる従業員もいて誰が健常者か障がい者かわからないほど。健常者採用に当たっては養護教育等の資格や教育を受けてきた経歴はかえって妨げとなることがあり、人それぞれに合わせた対応が取れる優しさを持つ人がふさわしいと説明を受けた。

この会社の企業理念は障がい者に限らず一般の教育現場や会社が人を育てるという点において通じるものが多く、中でも社員一人一人に対する関心と愛情を持ち、たゆまない工夫と努力で社員方々が育ち幸せにつながることで、人にやさしい会社が目指すユニバーサル化はすべての人に恩恵を受けることを学んだ視察であった。



▲研修状況（西川一仁 常務取締役）



▲研修状況



▲施設内見学



▲施設内見学



▲日本理化学工業株式会社美唄工場

#### （４）【砂川市役所】

視察項目 認知症予防や治療の取組について

視察目的 認知症疾患医療センター設立までの経緯と現状について調査する。

- 応 対 者
- ・砂川市議会 小黒 弘 副議長
  - ・砂川市議会事務局 為國修一 事務局長
  - ・砂川市議会事務局 安武浩美 次長（進行）
  - ・砂川市立病院事務局管理課 為国泰朗 管理課長

- ・砂川市立病院事務局管理課  
大坂衣里 課長補佐兼庶務係長
- ・認知症疾患医療センター地域生活支援係  
大辻誠司 主査（説明員）

内 容 地域生活支援係、大辻誠司主査よるパワーポイントを使用した説明があった。内容は現在の病院の紹介と平成16年2月砂川市立病院もの忘れ専門外来を開始3科で認知症診断し早期発見早期治療が行ない他機関とも連携するなど認知医療で先進的な取組を続けていることが評価されている。

平成16年12月「痴呆」の行政用語「認知症」に変更される。支えあい連携手帳、認知症のご本人と家族と医療・介護・福祉の多職種が記入して連絡し合い、よりよい認知症ケアを実現するための作成していることであった。

また、認知症疾患医療連携協議会には保健所、NPO法人、認知症ケア研究会、包括支援センター、消防、警察、家族会と連携し、第22回全空知認知症グループホームと意見交換会を実施し情報共有、高齢者施策、高齢者事件・事故、運転免許返納、家族会活動等意見交換を行っていることについて説明を受けた。

所 感 砂川市立病院認知症疾患医療センターと砂川市地域包括支援センターと砂川市介護福祉課（課長・係長）において協働チームで認知症初期集中支援チームで行っている。

砂川市立病院認知症疾患医療センターのこれからということで、医療：病床削減で工夫した入院医療・新薬レカネマブへの対応連携：認知症基本法施行後の市町村との連携・若年性認知症当事者の会障がい者事業所（就労A・B型）との連携啓発：若年認知症の人と家族の会「空知ひまわり」設立、地域希望大使の誕生と後方支援、レビー小体型認知症本人家族交流会等先進地認知疾患医療研修を終えて、砂川市立病院認知症疾患の取組は十勝には帯広に大江病院しかなく遅れていると思った。今後、もっと増えるであろう認知症疾患を十勝全体で広域連携をして問題を共有していかなければならないと考える。一町村では限界があり、帯広市が中心に広域連携して行くべきだ。

幕別町で近年、認知症疾患で自宅に戻れなくなる事例があった。早急に制度見直しを迫られていると実感した。



▲砂川市議会 小黒副議長挨拶



▲谷口和弥委員長挨拶



▲説明員（認知症疾患医療センター  
地域生活支援係 大辻誠司主査）



▲研修状況



▲荒貴賀副委員長挨拶